

ACL 再建術における Cyclops 病変の発生要因について

○藤井 政孝 (ふじい まさたか) (MD)¹⁾, 阿部 信寛 (MD. PhD)²⁾, 古松 毅之 (MD. PhD)¹⁾,
宮澤 慎一 (MD. PhD)¹⁾, 高田 直樹 (MD)¹⁾, 横山 裕介 (MD)¹⁾, 岡田 幸正 (MD)¹⁾,
尾崎 敏文 (MD. PhD)¹⁾

¹⁾ 岡山大学病院 整形外科

²⁾ 岡山大学大学院 運動器知能化システム開発講座

【はじめに】

膝前十字靭帯 (以下 ACL) 再建術後の膝関節伸展制限は重大な問題であり, その原因の一つとして Cyclops 病変がある. 今回我々は解剖学的二重束 ACL 再建術後に再鏡視を施行し Cyclops 病変の発生率, 発生要因について検討した.

【対象及び方法】

当院にて ACL 再建術を施行し, 平成 18 年 1 月から平成 23 年 7 月に再鏡視を施行した 40 例を対象とした. 再建術から再鏡視までの平均期間は 12.8 ヶ月 (8 - 36 ヶ月) であった. 前内側線維束 (以下 AMB) 及び後外側線維束 (以下 PLB) の太さ, 脛骨孔径と顆間断面積の比率を計算し Cyclops 病変発生との関係について検討した.

【結 果】

再鏡視にて Cyclops 病変を認めた症例は 10 例 (25%), その中で伸展制限を認めた症例は 4 例 (10%) であった. AMB, PLB の大腿骨孔径をそれぞれの太さとして断面積を計算し, 脛骨孔も同様に断面積を算出した. 顆間面積は MRI で大腿骨 Blumensaat's line の前後中心の冠状断で顆間幅, 高さから計算した. Cyclops 病変を認めた群で有意に顆間面積が狭かった. また Cyclops 病変を認めた群で顆間面積に対し AMB, 脛骨孔断面積が占める割合が有意に大きかった.

【考 察】

Cyclops 病変の発生原因としては, 再建靭帯, 特に AMB の顆間部での impingement, 骨孔作成後の骨軟骨組織の遺残などが報告されている. 当科の症例では, 顆間が狭く AMB が太い症例において Cyclops 病変発生が有意に多かった.